様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：２４４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００２３５

研究課題名（和文）被災地芸能の動態的保存と実践的拡張

研究課題名（英文）Dynamic preservation and practical expansion of performing arts in disaster area

研究代表者
橋本　裕之（HASHIMOTO, Hiroyuki）

大阪公立大学・都市科学・防災研究センター・客員研究員

研究者番号：７０２０８４６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：東日本大震災を契機としてコンテンポラリーダンスが被災地の芸能と遭遇する機会が増えている。2018年より神戸のダンス系NPOの拠点で、岩手県大槌町に伝承される虎舞の担い手からダンサーが学ぶ機会が定期的に設けられてきた。習得した神戸のグループは半ば自立し、地域の祭礼やイベントに請われて舞う機会が増加している。本研究では、このグループの誕生と成立を、震災が引き起こした新たな文化の生成過程と捉え、東北と関西という文化的脈絡、習得のプロセス、レパートリーの拡張、上演機会などに焦点を当てて、その経緯の詳細な分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地域外の他者による郷土芸能の習得・伝承は、近年日本全国で散発的に始まっているが、被災地芸能を対象とするものはこれまでになかった。本研究は被災地芸能を遠隔地においてコンテンポラリーダンサーが動態保存するという特異な状況を対象とするものであり、社会包摂論、実践共同体論、コミュニティアート論、二次創作論などが交差する領域に寄与するという意味で、高い学術的意義を持っている。また、遠隔地の芸能を移転するという方法は、民俗芸能の衰退が全国的に危惧されるなか、その地域的密着性を相対化する視点を提起するものとして、全国の芸能の今後の継承のあり方に大きな示唆を与えるものであり、高い社会的意義を持っている。

研究成果の概要（英文）：The Great East Japan Earthquake has provided more opportunities for contemporary dance to encounter the performing arts in disaster area, and since 2018, dancers have had regular opportunities to learn from the bearers of the tiger dance tradition handed down in Otsuchi Town, Iwate Prefecture, at the base of a dance-related NPO in Kobe. The Kobe group that has learned the dance has become semi-independent and is increasingly being invited to dance at local festivals and events. This project views the birth and formation of this group as a new cultural creation process triggered by the earthquake, and provides a detailed analysis of the process, focusing on the cultural context of Tohoku and Kansai, the learning process, repertoire expansion, performance opportunities, and so on.

研究分野：演劇学・民俗学（民俗芸能研究）

キーワード：被災地芸能　動態的保存　実践的拡張　東日本大震災　郷土芸能　大槌城山虎舞　阪神虎舞　コンテンポラリーダンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

東日本大震災が起こった当時、岩手県文化財保護審議委員会の委員をしていた橋本裕之（研究代表者）が中川眞（研究分担者）に呼びかけて「文化によるコミュニティ再生」活動に取り組んだ。有形文化財修復に重きをおく文化庁の方針に危機感を覚えた我々は、民間の財団などに働きかけて無形文化財に対する経済的支援の道筋をつくるとともに、岩手県の現場において無形民俗文化財の復興支援を行った。その中に、今回の研究対象となった大槌町の大槌城山虎舞が含まれていた。大槌城山虎舞は虎頭や太鼓のほか、祭礼時の巡行のための屋台車も全壊の被害を受け、その回復に橋本は尽力した。その後、大槌城山虎舞は率先して避難所などへの慰問や慰霊の奉納をするなど、コミュニティの再結束のための大きな働きをし、文化による復興の旗手的存在となった。その成果を見つつ、経済的価値を生む方策はないかという問いのもと科研（挑戦的萌芽）「芸能復興と被災地ツーリズム」(研究代表者：橋本裕之)を実施した。

震災直後から関西などの遠隔地による支援の可能性を考えていた中川は、橋本とともに、義援金や支援を活性化させるために、被災地の芸能団体（虎舞や神楽など）を招聘し、関西公演を延べ 10 回以上開催した。その過程で、被災地芸能は遠隔地の人々の中に忍び寄る「震災の風化」に抗うためのメディアになり得ることに気づいた。だが、継続的に被災地から招聘するのは経済的に限界があった。そこで、いっそのこと関西で東北の芸能を担う団体を作ればいいのではないかという突飛な発想のもと、科研(挑戦的研究)「被災地芸能の二次創作に関する実践研究」(研究代表者：橋本裕之)に取り組み、虎舞の関西移転作業を 2018 年に始めた。

前例がないゆえに手探りの状態であったことは否めない。しかし神戸のダンス系の NPO であるダンスボックスが拠点となり、プロのダンサーが受け皿になることによって一気に事態は進展し、ようやく軌道に乗ってきたため、本研究はそれを受け継いだ。レパートリーの拡張は当初から重要な課題だったため、コンテンポラリーダンスの創作と研究を手掛けている関典子（研究分担者）にも参加を呼びかけた。

２．研究の目的

本研究は、被災地芸能を遠隔地においてコンテンポラリーダンサーが動態保存するという特異な状況を対象とするものであり、複数の学術的背景が想定される。社会包摂論、実践共同体論、コミュニティアート論、二次創作論などが交差する領域である。

社会包摂論は「被災」という事象と関わる。大規模な被災は家屋の損壊、多数の死傷者、公共インフラの破壊とともに文化をも損壊する。被災社会は通常の社会的サービスを受けられず孤立化は免れない。その復興の過程において郷土芸能がコミュニティ再生の強力なメディアになる例が、特に東日本大震災において多数見られた。結果、被災地芸能に焦点を当てた研究はその後、急増した。高倉浩樹・滝澤克彦編『無形文化財が被災すること』（新泉社、2014 年）、橋本裕之『震災と芸能―地域再生の原動力―』（追手門学院大学出版会、2015 年）の民俗学的観点からのアプローチは、ともすれば有形文化財の損壊のみに注意が奪われがちな文化財被災に大きな一石を投じた。また芸能が被災者を包摂してゆくというプロセスは、「社会によって支えられている文化」ではなく「文化によって支えられる社会」という視点を研究者にもたらしつつある。

上記の視点はレイヴとウェンガーによる実践共同体（community of practice）論の拡張を示唆する。従来の職場や学校、サークルを前提とする彼らの理論では、本研究の実践様態は正確には捉えられない。そこでパットナムの社会関係資本の２つの類型、すなわち結束型と橋渡し型という分類を本研究の対象に当てはめ、橋渡し型つまり外部に開いた実践共同体と考えることが可能なのではないかという立論から出発する。そこを突き詰めると、実践共同体論の拡張につながる道筋が見えてくるであろう。

芸能は社会と密接な関わりをもつゆえに、神戸のグループ（以下、阪神虎舞という）はコミュニティアート論で論じられる必要がある。イギリスに端を発するコミュニティアートの概念は 20 世紀末から日本でも急速に受容され、やがて地域アートフェスティバルへと拡張してゆくとともに、地域アート研究が増えてきた。ともすれば「まちづくり」に奉仕するアートの状況を批判的に捉える藤田直哉編『地域アート』が本研究での重要な論点となる。阪神虎舞は、伝統芸能の技法を学びながらも伝統にとらわれず、新たな作品を開拓しつつある。その現象は二次創作論の観点から考察する必要がある。活動射程の幅は広く、観光イベントなどのフォークロリズム的文脈のみに回収されることなく、神聖な奉納芸、実験的なダンス作品など多様な表現形態の間を揺れ動く。その越境性が二次創作の概念の拡張につながる材料を提供する。

上記の学術的背景を踏まえて、本研究の目的に直結する核心的問いは２つ設定した。第１は、阪神虎舞の営為は、被災後の郷土芸能のあり方を示唆するものと捉え、「郷土芸能の実践共同体を開放系に転位させたらどうなるか、どのような理論的な可能性がもたらされるか」という問いである。従来、郷土芸能は閉鎖的でよそ者の介入をよしとしないところがあるが、本来の文脈から切り離された環境で発足した阪神虎舞には伝統の軛は存在しない。開放系の郷土芸能が今後

どのような道を歩んでいくのか極めて興味深い現象であり、実践共同体論や社会関係資本論の変革、拡張に貢献すると考える。この問いを意識しながら、阪神虎舞がコミュニティとの関係 性の中から新たな文化的文脈を形成してゆく過程を明らかにする。

第２は、ダンサーは芸能とコンテンポラリーダンスという身体技法の大きく異なる舞踊のジャンルを往還しながら新たな虎舞作品の創作に挑戦しつつある、そのプロセスを観察して、新作が「どのような内容になるのか、どういった人々に向けてつくられるのか」といった素朴ではあるが創作と受容を考える場合の要の問題に取り組みたい。コロナ禍において芸能における神事性と娯楽性の分裂が露わとなった。新たな虎舞が神事と娯楽の狭間でどのような位置どりができるのかという考察にも繋げてゆけるであろう。かくして、本研究の目的は以下のとおりである。

岩手県大槌町に伝承される虎舞を習得した阪神虎舞は半ば自立し、地域の祭礼やイベントに請われて舞う機会が増加している。本研究では、このグループの誕生と成立を、震災が引き起こした新たな文化の生成過程と捉え、東北と関西という文化的脈絡、習得のプロセス、レパートリーの拡張、上演機会などに焦点を当てて、その経緯とパフォーマンスの詳細な分析を行うことを目的とする。そして成果として、前述した核心的問いに関して、理論的枠組みを更新・拡張したりすることに貢献するものである。民俗芸能の衰退が全国的に危惧されるなか、本研究はその地域的密着性を相対化する視点を提起するものとして、全国の芸能の今後の継承のあり方に示唆を与えると考えられる。

３．研究の方法

研究の方法としては参与観察的に阪神虎舞のあらゆる活動に寄り添い、映像と聞き取りに基づくデータを蓄積し、分析の対象とする。また神社や商店街など受け手の側へのアンケート調査を実施し、社会的インパクトの考察も行うというものだった。とりわけ 2021 年度は分析のためのデータベースづくり、2022 年度はデータ（アンケートを含む）の追加と分析の開始、2023 年度は分析結果の取りまとめと新作の発表、移転プロセスのモデル化を予定していた。

2021 年度は分析のためのデータベースづくりに着手するべく、①虎舞ワークショップ調査、②大槌まつりへの参加調査、③関西におけるパフォーマンスが行われる少彦名神社（大阪市）廣田神社（西宮市）などの調査（随時）、④研究会を予定していた。①は大槌町より大槌城山虎舞のメンバーを招聘し、神戸において舞・笛・太鼓のワークショップを実施して、全プロセスの記録とインタビューも実施する、②は大槌まつりにコンテンポラリーダンサーが虎舞の演者として参加するプロセスを記録して、インタビューを実施する、③は神社における奉納を記録して、商業ベースのオファーによるパフォーマンスも記録する、④はダンサーを交えて研究手法、分析枠組などの検討を実施するというものだった。

だが、2021 年度は新型コロナ禍によって、阪神虎舞の活動じたいがほぼ停止してしまった。実際は６月に予定していた虎舞ワークショップ、９月に予定していた大槌まつり、２月に依頼されていた全国虎舞フェスティバルがいずれも中止されて、参加調査を実施することができなかった。全体としても当初の予定を十分に遂行することができなかったが、研究会は 12 月に舞手やスタッフを交えて、報告会「虎舞を演じてきて」として実施することができた。調査は停滞気味だったが、研究は順調だったといえるだろう。

2022 年度はデータ（アンケートを含む）の追加と分析の開始を推進するべく、①データの追加、②分析、③創作支援を予定していた。①は前年度と同様に、各祭礼に参加して、外部オファーなどの調査を実施する、②はデータの分析を開始する、③はダンサーによるパフォーマンスの創作を支援するというものだった。だが、2022 年度も新型コロナ禍によって、阪神虎舞の活動は依然として停滞気味だった。全体としても十分な活動を展開することができなかったため、当初の予定を変更せざるを得なかったが、幸いにも各地の神社で奉納することができた。

橋本が現役の神職であることも手伝って、新型コロナが依然として猛威を振るう今日、各地の神社において奉納するのみならず神賑や清興としても上演する機会に恵まれたことは、阪神虎舞の活動を維持する上で大きな出来事だった。こうした機会は神社を身近な存在として認識していなかった大半のメンバーにとってみれば、まったく新しい経験をもたらしている。それはコンテンポラリーダンスに代表される上演形態を相対化して、阪神虎舞が取り組むべき上演形態の可能性を多様化するものであったということができるだろう。

こうした経験を言語化して共有するべく本来ならば研究会を開催するべきだったが、新型コロナ禍を念頭において舞手やスタッフの全員がレポートを執筆することによって、「神事芸能としての阪神虎舞」という視座を確認することができた。また、橋本も「神事芸能としての阪神虎舞」という論文を完成させた。したがって、新型コロナ禍の影響を受けて活動の範囲こそ制限されてしまったが、研究は順調であったといえるだろう。「神事芸能としての阪神虎舞」という視座は必ずしも当初の計画において大きな比重を占めていなかったが、これも被災地芸能の動態的保存と実践的拡張の好例であると考えている。

2023 年度は分析結果の取りまとめと新作の発表、移転プロセスのモデル化を完成させるべく、①分析成果の検証、②モデル化、③虎舞フォーラムを予定していた。①はダンサーの身体性の変化、社会・文化的脈絡の変化、パフォーマンスの変容、新作の特徴などを解明する、②は芸能移転の試みのモデル化を図り、研究者・実践者が共有できる冊子形態を作成する、③は研究の集大成的な成果（パフォーマンスを含む）の発表、それらを踏まえて学会発表、論文執筆、ウェブ発

信へとつなげるというものだった。だが、新型コロナ禍によって当初の計画を変更せざるを得なくなったため、集大成的な成果として予定していた虎舞フォーラムは阪神虎舞５周年記念特別公演「門打・曳舟・雌虎―阪神虎舞の動態的保存と実践的拡張に向けて―」に変更した。

研究体制を構成する３名は、橋本が科研「芸能復興と被災地ツーリズム」と「被災地芸能の二次創作に関する実践研究」、中川が科研「芸術によるコミュニティ創出」の研究代表者を務め ており、これまで東日本大震災以降の文化による復興研究に携わってきた。両名の成果は橋本裕之『震災と芸能―地域再生の原動力―』（追手門学院大学出版会、2015 年）、中川真『アートの力』（和泉書院、2013 年）などに集成されている。また、関は自身がコンテンポラリーダンサーであり、コンテンポラリーダンスの創作と研究を手掛けてきた。過去の舞踊の再構成・再創造というテーマで、振付家 M.フォーキンが振り付けたバレエ『瀕死の白鳥』を事例として、フォーキン自身が遺した舞踊譜（1925 年出版）を手掛かりに復元上演を行い、同時に新作コンテンポラリーダンス版の初演も行った。

橋本は民俗芸能研究、中川はアーツマネジメント、関は舞踊学の分野において第一人者であり、フィールドワークや実践的な活動、研究に関する卓越した成果をあげている。こうした３名が集結して蓄積してきた専門的な知見を統合することによって、本研究を高い水準で遂行することができる。なお、橋本は関西の大学に研究拠点を置くが、岩手県文化財保護審議会委員を務めた経験を持ち、現在も頻繁に関西と東北を往復しているため、被災地における芸能の活動状況を把握することができる立場にある。中川も関西の大学に研究拠点を置き、東日本大震災以降は橋本と連携して被災地における芸能に関する各種のプロジェクトを手がけてきた。社会包摂型アーツマネジメント研究の第一人者である。関も関西の大学に研究拠点を置き、阪神虎舞におけるレパートリーの拡張という課題に関して、コンテンポラリーダンサーとして実践的な知見を提供することができる。

４．研究成果

2021 年度は４月 16 日に兵庫県西宮市に鎮座する廣田神社の春祭りにおいて、阪神虎舞を奉納することができた。廣田神社は阪神タイガースが必勝を祈願することによって知られており、以前も大槌城山虎舞や阪神虎舞が奉納されているが、サポートメンバーとしてトーゴ出身のコンテンポラリーダンサーでありパーカッショニストでもあるアラン・シナンジャに参加してもらって、拝殿で斎行された祭典においてモバギガンネという民族楽器の太鼓を用いた「遊び虎」を奉納した。そして、祭典が終了した後は拝殿前の参道で「遊び虎」「跳ね虎」「笹ばみ」を演じた。当日は参拝者や保育園の園児を含めた近隣の住民が観覧して、盛大な拍手喝采を受けた。

これは岩手県沿岸部の虎舞、とりわけ大槌城山虎舞を二次創作した阪神虎舞が自身を二次創作する、いわばｎ次創作の一例だろう。もちろんこうした試みは阪神虎舞の中心的なメンバーがコンテンポラリーダンサーであることに由来している。拝殿で神前に向かって舞うという経験は舞手にとってみれば初体験であり、観客の存在を念頭に置かないという意味で新鮮だったようである。

だが、以降は前述したとおり、新型コロナ禍によって阪神虎舞の活動じたいがほぼ停止してしまった。６月に予定していた虎舞ワークショップ、９月に予定していた大槌まつり、２月に依頼されていた全国虎舞フェスティバルがいずれも中止されて、調査を実施することができなかった。ようやく年が明けて１月は正月三が日に大阪府下のショッピングモール３か所において阪神虎舞を披露して、2022 年１月 16 日に廣田神社の阪神淡路大震災追悼式でも奉納する機会にも恵まれたが、こうした感覚は 2022 年１月 16 日に廣田神社で阪神淡路大震災追悼式が斎行されて、これは阪神虎舞を立ち上げた目的の一つが実現した出来事だった。

2022 年３月 11 日、阪神虎舞は長田港において、眼前の海が三陸の海につながっていることを想起しながら、水平線に向かって舞った。これは東日本大震災の犠牲者を追悼するものであったため、観客の存在を念頭に置いていない。もちろん特定の神社に奉納したわけでもないが、こうした試みも阪神虎舞を神事芸能として位置付ける視座を舞手に強く意識させるものだったといえるだろう。だが、2021 年度の活動は全体として低調だった。一方、12 月に舞手やスタッフを交えて報告会「虎舞を演じてきて」を実施して、虎舞を演じてきた経緯を振り返りながら、今後の可能性を検討した。その成果は日高真吾・橋本裕之・中川眞編『阪神虎舞の誕生―被災地芸能の文化的脈絡の拡張―」（大阪市立大学都市研究研究プラザ、2022 年）にまとめることができた。

2022 年度も神社で奉納する機会が大半を占めたことは、阪神虎舞の世話人を務める橋本裕之が坐摩神社の権禰宜として奉職しているという事情が少なからず影響しているだろうが、新型コロナウィルス感染症禍によって公演する機会を少なからず失った阪神虎舞に対して、いわば呼吸する場を提供したという意味において重大な出来事だった。すなわち、阪神虎舞は発足した直後にいわゆる伝承の危機に瀕したわけであり、図らずもそのような状況を解決する方法こそが「神事芸能としての阪神虎舞」だったともいえそうである。

以下、2022 年度の活動実績を列挙しておけば、①４月３日／住吉神社節句祭@住吉神社勅使塚、②４月 16 日／廣田神社春祭@廣田神社拝殿・境内、③８月 16 日／子どもダンス留学@神戸 2022@ArtTheater dB KOBE、④９月 12 日／兵庫県神道青年会再建五十五周年記念式典@湊川神社神能殿、⑤11 月 13 日／土生神社六覺千手大 絵馬展@土生神社拝殿・社務所、⑥12 月 25 日／

綱敷天満宮納め天神@綱敷天満宮拝殿・境内、⑦１月 17 日／神戸震災復興フリーイベント ONE HEART～繋げよう未来 へ～@大正筋商店街、⑧２月 25 日／梅花祭@綱敷天満宮境内、⑨３月 11 日／東日本大震災復興祈願@長田港、⑩３月 26 日／新長田くにづかローカル＆ワールドフェスティバル@大正筋商店街の計 10 回。

2023 年度の活動実績は、①４月 16 日／廣田神社春祭@廣田神社、②４月 19 日／多井畑厄除け八幡宮例大祭@多井畑厄除八幡宮、③８月８日／子どもダンス留学@神戸 2023@ArtTheater dB KOBE、④10 月７日／ひょうご矯正展@神戸刑務所、⑤11 月 12 日／日本の伝統芸能を楽しむ会―トラの舞、シシの舞―@里山文化交流センターぶらっと、⑥12 月８日／ニューあそび場の創造 2023 年 12 月@新開地アートひろば、⑦１月 17 日／神戸震災復興フリーライブ ONE HEART―繋げよう未来へ―@大正筋商店街、⑧１月 20 日／阪神虎舞５周年記念公演@ArtTheater dB KOBE ほか、⑨１月 21 日／阪神タイガース令和５年優勝記念・令和６年優勝祈願阪神虎舞奉納演舞@廣田神社、⑩２月 25 日／歴史・文化シンポジウム「災害復興と地域遺産」@園田学園女子大学、⑪３月 11 日／東日本大震災復興祈願@長田港、⑫３月 26 日／しんながた・くにづかローカル＆ワールドフェスティバル@大正筋商店街の計 12 回。こうした活動実績を通して、実証研究のデータを蓄積しているところである。以下、集大成的な成果ともいえる特別公演の概要を紹介しておきたい。

阪神虎舞は 2018 年、東日本大震災に関する記憶の風化に抵抗するべく、岩手県上閉伊郡大槌町を拠点として精力的に活動している大槌城山虎舞に触発されたコンテンポラリーダンサーなどによって、阪神大震災の被災地である兵庫県神戸市長田区の新長田で結成された。／現在、科学研究費助成事業「被災地芸能の動態的保存と実践的拡張」を活用した実験的なプロジェクトとして、さまざまな機会に上演することによって成果を蓄積しているが、当該プロジェクトの最終年度に際して集大成の場を創出する。／実際は阪神大震災が発生した１月 17 日、虎舞に付随する簡易な山車を作成して大正筋商店街・新長田１番街商店街・若松公園を練り歩いた上で、長田港において漁船を利用した曳舟を実施して船上の虎舞を披露する。これは阪神大震災と東日本大震災の犠牲者に向けた慰霊奉納を意図しているが、同時に大槌まつりにおける門打と曳舟という伝統的な上演形態じたいを動態的に保存することを意味している。とりわけ曳舟は新長田と大槌が海を介して繋がっていることを再認識する契機として重要である。／船上の虎舞を披露した後は、コンテンポラリーダンスに関する多様な活動の場であるダンスボックスにおいて、大槌城山虎舞の特別協力も得ながら、新規に創作する演目「雌虎」を含めた全演目を披露する。これは阪神虎舞をコンテンポラリーダンスとして実践的に拡張する試みを意図している。「雌虎」についていえば、大槌町において女性が虎舞を演じる事例がまったく存在しない一方、阪神虎舞は女性の舞手が中心的な存在として活動している。したがって、「雌虎」は阪神虎舞が発足した当初から構想していた課題だった。／この阪神虎舞特別公演「門打・曳舟・雌虎―阪神虎舞の動態的保存と実践的拡張に向けて―」は、伝統的な様式を踏襲しながら革新的な実験に挑戦してきた阪神虎舞の活動を集大成することによって、阪神虎舞の現在地を周知させる絶好の機会であると信じている。

地域外の他者による郷土芸能の習得・伝承は、近年日本全国で散発的に始まっているが、被災地芸能を対象とするものはこれまでになかったという点で、本研究のアプローチは独自である。また、遠隔地の芸能を移転するという方法は、そもそも橋本と中川による発案である。学術的なひらめきを実践サイドが受け止め、実現させてゆくプロセスはきわめて創造的であり、民俗芸能の衰退が全国的に危惧されるなか、その地域的密着性を相対化する視点を提起するものとして、全国の芸能の今後の継承のあり方にも大きな示唆を与えるものである。さらに、本研究では新たな作品群の創作過程の記録・解析をも支援の形で実施している。成果としての新しい作品の誕生（「雌虎」）はまさに創造的所産といえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 橋本裕之	４．巻 148
２．論文標題 繭としての神社	５．発行年 2024年
３．雑誌名 神青協通信	６．最初と最後の頁 6－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本裕之	４．巻 なし
２．論文標題 中世芸能のガラパゴス	５．発行年 2023年
３．雑誌名 國學院大學博物館特別展「三嶋の神ノモノガタリー焼き出された伊豆の神々ー」図録	６．最初と最後の頁 66－67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本裕之	４．巻 17
２．論文標題 牛に乗る男	５．発行年 2023年
３．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	６．最初と最後の頁 31－58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本裕之	４．巻 35
２．論文標題 牛乗式起源異考ー越中における中世前期の祭礼芸能、その痕跡を探る―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 神道文化	６．最初と最後の頁 77－95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 28
2．論文標題 諏訪の王の舞	5．発行年 2023年
3．雑誌名 神社本庁総合研究所紀要	6．最初と最後の頁 29－59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 29
2．論文標題 桟敷史序説追考	5．発行年 2023年
3．雑誌名 季刊藝能	6．最初と最後の頁 251－271
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川眞	4．巻 101
2．論文標題 十津川の大踊り・盆踊り	5．発行年 2023年
3．雑誌名 民俗芸能	6．最初と最後の頁 46－62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 16
2．論文標題 仮面を阿弥陀に被る理由	5．発行年 2022年
3．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6．最初と最後の頁 29－41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 49
2．論文標題 憑坐と風流―曽根文省「東播磨の一ツ物神事」を読みなおす―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 神麓	6．最初と最後の頁 5－7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 310
2．論文標題 災害と芸能―東日本大震災から新型コロナ禍へ―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本民俗学	6．最初と最後の頁 21－38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関典子	4．巻 20
2．論文標題 Zoomで観るバレエ・リュスー薄井憲二バレエ・コレクションを中心にー『牧神とニンフの午後』解題ー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6．最初と最後の頁 69－90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 15
2．論文標題 鷺舞と牛舞の由緒	5．発行年 2021年
3．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6．最初と最後の頁 20－32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 65
2．論文標題 稲荷祭の芸能―『年中行事絵巻』に描かれた王の舞その他―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 朱	6．最初と最後の頁 183－216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本裕之	4．巻 9・10
2．論文標題 果心居士の芸能	5．発行年 2022年
3．雑誌名 儀礼文化	6．最初と最後の頁 57－78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 柴崎加奈子・関典子・清水大地
2．発表標題 “踊り”から見る身体の可能性
3．学会等名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 学術weeks 2023
4．発表年 2023年

1．発表者名 関典子・ほんまなほ・大野彩子・古後奈緒子
2．発表標題 バレエの中の人形から人間を考える―VR発達障害体験会―
3．学会等名 大阪大学中之島芸術センター・大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館アート人材育成プログラム「中之島に鼬鼠を放つ」リサーチ・フレーム〈アートとその分身人間／人形の曖昧な境界〉
4．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木晶・関典子・若林絵美・三浦栄里子・佐藤一紀
２．発表標題 バレエ・コレクションから開かれる世界―見る・踊る・創る・語る―
３．学会等名 江東区森下文化センター 秋の特別企画展「山岸凉子のバレエ・マンガでたどるバレエの美」関連イベント（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 関典子
２．発表標題 薄井憲二バレエ・コレクションの魅力―キュレーターとして、ダンサーとしてー
３．学会等名 江東区森下文化センター 秋の特別企画展「山岸凉子のバレエ・マンガでたどるバレエの美」関連イベント（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 関典子・渡辺真弓・植松侑子
２．発表標題 with コロナでのこれからの舞踊界
３．学会等名 田毎の会第20回総会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 Echo from Japanese Gamelan
３．学会等名 Bali World Culture Celebration 2022: Balinese Gamelan on Global Stage (online)
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shin Nakagawa
２．発表標題 How is Gamelan developing in Japan? : A Case Report on Marga Sari (Osaka/Kyoto)
３．学会等名 The 19th Urban Research Forum in Yogyakarta,Institut Seni Indonesia (online)
４．発表年 2022年

１．発表者名 関典子
２．発表標題 踊るキュレーター：歴史的な資料と現代の創作の交点から
３．学会等名 第1回 日本ダンス研究会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 関典子
２．発表標題 舞踊創作の魅力と舞踊資料の活用について～アートとその分身：人間／人形の間：人形の精と踊る私～
３．学会等名 大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館「中之島に鼬を放つ―大学博物館と共創するアート人材育成プログラム」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 関典子
２．発表標題 コンテンポラリーダンス、舞踏、バレエ～歴史的な資料と現代の創作の交点から～
３．学会等名 令和4年西宮市生涯学習大学「宮水学園」芸術講座（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中川眞
２．発表標題 Arts with COVID-19
３．学会等名 アートミーツケア学会年次大会〈オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中川眞
２．発表標題 東南アジアおよび日本におけるアーツマネジメントによる国際ネットワークの形成
３．学会等名 東南アジア学会オンライン例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中川眞
２．発表標題 被災地芸能の文化的脈絡の拡張―虎舞（岩手県）を事例として―
３．学会等名 東アジア包摂都市ネットワーク国際シンポジウム〈オンライン）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤真之・関典子・工藤聡
２．発表標題 コンテンポラリーダンスと宇宙物理―「モーション・クオリア」研究への寄与―
３．学会等名 第35回天文教育研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Noriko Seki, Keiko Saito, Eriko Miura
２．発表標題 Inspired by Ballets Russes: Kenji Usui's unique collection
３．学会等名 St. Petersburg Culture Committee / St. Petersburg State Theatre Library: Saving the Past, Creating the Future（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 関典子
２．発表標題 Zoomで観るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションを中心に
３．学会等名 日本ヴィクトリア朝文化研究学会第21回大会 シンポジウム「Ballets Russes：ロマン主義からモダニズムへの変革」（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計8件

１．著者名 中川眞（ほんまなほ、石橋友美と共編）	４．発行年 2024年
２．出版社 大阪公立大学都市科学・防災研究センター	５．総ページ数 114
３．書名 再結晶する自己	

１．著者名 橋本裕之（監修）	４．発行年 2022年
２．出版社 学研プラス	５．総ページ数 76
３．書名 日本の神々のぬり絵	

1．著者名 橋本裕之	4．発行年 2023年
2．出版社 二戸市教育委員会	5．総ページ数 49
3．書名 呑香稲荷神社神代神楽調査報告書―呑香稲荷神社神代神楽の歴史と現在―	

1．著者名 中川眞（監修）	4．発行年 2023年
2．出版社 一般社団法人スペース天	5．総ページ数 84
3．書名 Voices from A Vol.2	

1．著者名 日高真吾・橋本裕之・中川眞編	4．発行年 2022年
2．出版社 大阪市立大学都市研究プラザ	5．総ページ数 128
3．書名 阪神虎舞の誕生―被災地芸能の文化的脈絡の拡張―	

1．著者名 中川眞	4．発行年 2022年
2．出版社 森話社	5．総ページ数 288
3．書名 「地域市民演劇」の現在―芸術と社会の新しい結びつき―（「弱さ」とともにある表現―紙芝居劇団「むすび」―）	

１．著者名 中川眞監修	４．発行年 2022年
２．出版社 奈良地域伝統文化保存協議会	５．総ページ数 34
３．書名 十津川村の盆踊り解説集	

１．著者名 関典子	４．発行年 2021年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 352
３．書名 Butoh入門―肉体を翻訳する―(舞踏とコンテンポラリーダンス―和栗由紀夫との協働を超えて―)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中川　眞 (NAKAGAWA Shin) (40135637)	大阪公立大学・都市科学・防災研究センター・特任教授 (24405)	
研究分担者	関　典子 (SEKI Noriko) (30506457)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関